



昨年度の日本人の平均寿命は、男性79・19歳、女性85・90歳。いずれも過去最高を記録し、世界有数の長寿国をあらためて内外にアピールすることになった。

高齢化社会を背景に、医学が日進月歩を続ける中、人生の最後をどう迎えるかに関心が高まるようになってきた。治る見込みがない、あるいは、もうすぐそこに死が迫っているとしたら……。むろん、たとえ治療に苦痛がともなったとしても、一縷の望みをかけ、医師の延命治療に身を委ねる人も多いだろう。が、そんな中、

「無意味な延命措置をせずに、安らかに、自然な死を迎えたい」

という考えのもと、尊厳ある死を訴え続けてきたのが、日本尊厳死協会の副理事長を務める松根敦子さん(75)だ。「暑い中を、お疲れさまですねえ」

東京・本郷にある同協会の関東甲信越支部で記者を出迎えてくれた松根さんは、身長148センチと小柄ながら、ピンと背筋の伸びた、よく声の通る女性だった。

日本尊厳死協会は、1976年、産婦人科医で国会議員でもあった太田典礼氏が中心

死は、誰にも必ず訪れます 自分のために、家族のために 人まかせには したくないんです

……人生の終幕を、どのようにまっとうしたいか——。誰もが考えるべき問題だろう。

末期の病にかかったとき、無意味な延命治療を望まない「尊厳死」という選択肢。

松根さんは、その必要性を30年以上にわたって訴え続ける。「死について考えることは、命の尊厳について考えること」という松根さんの言葉は、重い。

自分らしく生きてきたから
自分らしい最期を

日本尊厳死協会 副理事長
松根敦子さん

となり、医師や弁護士などで発足された団体だ。現在、同協会の登録者数は11万2000人。男女比では約3対7と女性が圧倒的に多いが、「これは、女性には新たな命を世に送り出し育むと同時に、看取りを任せられるという側面があるからです。そのため、やはり男性より死を身近に考えざるをえないんですね。ただ、ここ数年は、妻にすすめられて……」と夫婦で登録される男性も多く、日本人男性の死に対する考え方も徐々に変化してきているような気がしますね」と松根さんはいう。

同協会に入会するには、リビング・ウィルと呼ばれる「尊厳死の宣言書」に署名・捺印し登録をすませる。リビング・ウィルとは、1967年にアメリカの「死の権利協会」が命名した造語で、それが60年代後期に入り、日本に上陸したのだという。

現在、同協会が定めるリビング・ウィルの要旨は3つ。
①、私の傷病が、現在の医学では不治の状態にあり、すでに死期が迫っていると診断された場合には、徒に死期を引き延ばすための延命措置は一切お断りいたします。
②、ただしこの場合、私の苦

痛を和らげる処置は最大限実施していただきたい。そのため、たとえ麻薬などの副作用で死ぬ時期が早まったとしても、一向にかまいません。

三、私が数ヶ月以上に涉って、いわゆる植物状態に陥った時は、一切の生命維持装置を取りやめて下さい。

以上、三つの宣言にしたがつてくださった時、すべての責任はこの私自身にあります」

協会では、これを保管、管理するほか、リビング・ウィルを提示したにもかかわらず、医師から拒否された際の説得に赴いたり、協会の弁護士が患者の意思を代弁することもあるという。

「最近、事前に医師に、尊厳死協会の会員だということ伝えておくことで、逆に告知がスムーズになることも多く、トラブルになるようなケースは少ないです。」

松根さんは1933年、東京・目黒区内の閑静な住宅街で生まれた。父の益治さんは旧制高校の英語教師で、「とにかく賑やかなことが大好きな人でしたからね。葬式には大勢の人を集めて麻雀大会をやって……なんていう話題

1人はほとんどありません。むしろよく問題になるのは、いつも世話をしている身近な方が、ご本人の意思を理解していないで、遠くに住んでいる親戚が横から出てくるケースです。ですから、そうならないために、まず登録する前にキチンとご家族と話し合いを持ち、意思の疎通をおこなうこと。そして、登録したら、必ず「自分の意思はこうなんだ」ということをオーブンにしておくことです。延命治療を施された後、亡くなってしまわなかったら、金庫の中から宣言書が出てきたのであれば、意味がないでしょう。リビング・ウィルとは、最愛の家族に贈る、最後にして最大の愛情表現なのです。」

「30歳にわたって、協会の仕事に携わりながら「尊厳ある死」を訴え続けてきた松根さん。そんな彼女の原点も、身近な家族の「死」にあった。」「夫は、縁あって日本テレビ

に入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

「見られるようになる。葬儀のことだ。私の娘が働いているのを見て、あの子よく働くけど、どこの子なの?」

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

過払い金 返還代理人

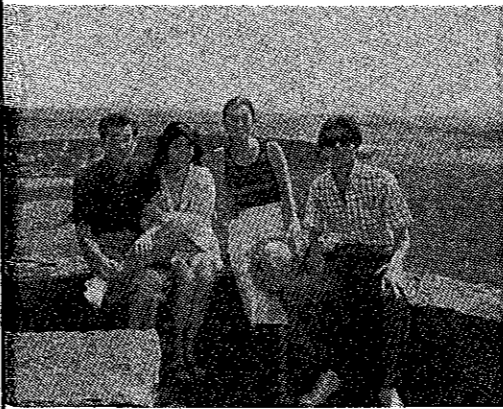
早いから一番!

過払い金は返してもらえます。あくまでも払いすぎた利息ですから。

相談無料 平日 9:00AM~8:00PM 土曜・日曜 10:00AM~6:00PM

朝日ホームロイヤー

03-3269-1000



82年に家族で撮影した写真。夫の光雄さんはテレビマン。目の回るような多忙な日々を送っていた

1年後、義母を看取った後も、その疑問が松根さんの脳裏から消えることはなかった。そんなある日のこと。ふと目にしたのが、渡辺淳一氏の小説「神々の夕映え」だった。

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」



日本尊厳死協会「尊厳死」の実現を促すために、早くも「生前の意思」を表明する「リビング・ウィル」の普及を推進している松根さん



「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

人海のなかで

日本尊厳死協会には、松根さん同様、身近な人の死をきっかけに入会してくるケースが少なくない。

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

「夫は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ人手も足りないから、野球中継のほかにも駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになってね(笑)。」

新しいインプラント(人工歯根)治療 もうう入れ歯とは さよようなら



年間1000本の実績!!

2007年度実績
本業は歯をかかせるまで最短でも3ヶ月程度かかりますが、わずか1日で歯を入れることができる画期的な方法です。歯をぬいたその日に、インプラント治療と同時に歯が入れられるため、治療期間中に歯がない、という事はありません。頻りに通えない歯の方でも安心して治療ができます。この他、状態に合わせて豊富なインプラント治療がございます。

一口元のたるみを改善

奇麗なだけでなく健康的な歯、機能的(かみ合せ)な歯を手に入れた方は審美歯科での治療をどうぞ。美しい笑顔と自信を手に入れるという効果もあります。

| | |
|---------------------------|----------|
| インプラント | ¥367,500 |
| その他、どめ金の無い見栄えの良い入れ歯もございます | |
| スマイルデンチャー | ¥157,500 |

東京都在住 女性 55歳
写真はインプラント術後の様です(公的保険は適用されません)

アイルクリニック

東京(池袋・品川)・名古屋(栄)・大阪(梅田)・福岡(天神)
http://www.biyou-net.com
0120-891-929
24時間メール受付
faq@biyou-info.com
●メール受信拒否設定をされている方へ
@biyou-info.comをドメイン登録してください。
QRコードで簡単アクセス!!

な思ひはさせたくない、って。そして、雑誌で調べてリビング・ウィルに登録したんです。以来、A子さんは、リビング・ウィルをお守り代わりに肌身離さず持ち歩いているという。

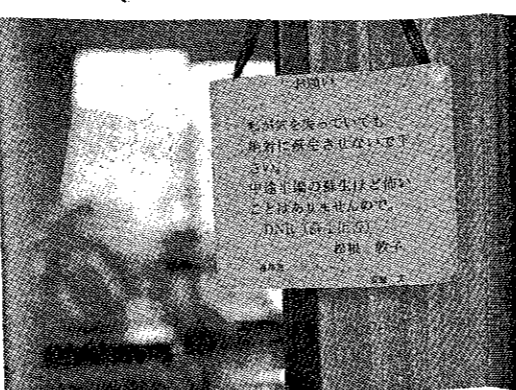
また、リビング・ウィルに登録したことで、

「本当に安らかな最期を迎えることができました」

と語るのは、松根さんの高校時代からの友人で、今年3月に夫をガンのために亡くした波多野ミキさん(74・日本尊厳死協会副理事長)だ。波多野さんの夫・里望さんが、のどの異変を訴えたのは3年前のこと。

「最初は風邪だろう、と思って耳鼻咽喉科に通っていたんですが、1か月たってもよくならない。で、大病院で検査を受けると、すぐに舌ガンが見つかったんです」

そこで、すぐに専門病院を



玄関を入ってすぐのところにある、松根さんの「意思表示」。自分らしい「最期」のための宣言でもある

訪れ

「リビング・ウィルを医師に提示して、どんなことでも本人に告知してほしい」と伝えました。すると主治医もそれを理解してくれて、とても良好な関係の中でインフォームド・コンセントが行われたんです」

インフォームド・コンセントとは、医師が患者に病状や検査結果、今後の治療方法と見通しをわかりやすく十分に説明し、患者はそれを納得したうえで、示された治療方法を選択し、同意するということ。つまり「患者に十分な説明と同意を得た医療」のことだが、検査の結果、里望さんのガンは、切開で取り除けるものと判断され、2人はこれに同意。結果、16時間にも及ぶ手術が行われた。

ところが、手術から3か月後「ようやく退院できる」となったときに、また口と肺から

くというタイプじゃなかったから」

しかし、さすがに本人もそのときは予感があったのか、病院で精密検査を受け、結果、見つかったのが口腔内から食道にかけて広がった悪性腫瘍だった。

「先生に何うと、すでに手術しても難しいという状態で、飯に抗ガン剤や放射線などの治療を施しても、かえって身体にダメージを与えるだけだろう、と。それならば、と入院せずにガンとの共生の道を選ぶことにしたんです」

当時はまだ地域の看護や介護体制が十分とはいえない時代だ。そう考えた松根さんは、ガン患者在宅医療専門の医師についてできる限りの情報を集め、何度も医師のもとへ足を運び、自宅で光雄さんを見ることを決意す

る。が、それでも緊急事態は覚悟しておかなければならない。

「そこで、先生に、今後、予想される症状について

亡き夫・光雄さんの仏壇の前で。光雄さんとの「会話」の手段だったマグネットボードは、当時のままだ



ガンが見つかってしまつて、

「このままの状態なら、余命は数か月だろうと……」そこで里望さんは、病床で家族に手紙をしたためた。が、その後、ガンは脳にも転移し、ついに緩和病棟に移ることに。

「でも、リビング・ウィルに登録していたことで、最期はとも充実した時間を過ごすことができました。辛い痛みがまったくなかったこともあって、病室では好きなお酒を飲みながら穏やかな日々を送ることができたし、最期となった日も、夕方からワインとビールを飲んで、夕食も完食。その後30分もしないうちに、本当に静かに旅立っていったんです」

文字どおり、眠るような最期だったという。

松根さんがいう。「数年前まで日本の医療現場では、医師对患者の間で、ま

伺ったんです。すると、ガンの部位が部位なので、呼吸困難による窒息死の可能性は否定できない、と……」

ほどなく気道確保のための、気管の切開手術が行われた。そして、もうひとつ松根さんが告げられた、予想される症状が、大出血だった。

「ひどい時には、天井まで噴き上がるほどの大出血があるかもしれない、とお医者さんから説明を受けました。そこで、部屋の隅には大判のタオルや古シーツを用意して、事態に備えたんです」

とはいえ、たとえどんな状況になろうとも、救急車を呼ばずに、自分の手の中で逝かせてあげたい。松根さんはそう覚悟していた。

しかし、97年10月19日。光雄さんは、そんな松根さんの心配をよそ

かせておきなさい、おまかせします」といったような、暗黙の上下関係がありました。でも、人権の尊重という姿勢が社会全体に浸透してきたことで、ようやくこの数年で医療のあり方も変わってきた。いわば尊厳死は、医療行為の最後のもっとも重要な

夫を看取って自分の「死」を考える

セミの大合唱が響き渡る8月のある日。松根さんが住む川崎市の自宅を訪ねた。

松根さんは11年前に夫・光雄さんが他界したあと、自宅を処分し、多摩川が見渡せるこのマンションでひとり暮らしをしている。

マンションの玄関を開けると、すぐに「延命治療はお断りします」と書かれたプレートが目に見え込んでくる。

「のどを切開してからは、会話はすべて筆談で、用事がある時は、主人がタンバリンを叩くんです。照れくさいから、いままでも人に見せたこと

はなかったんです……。まずいぶん時間もたつたし、主人も許してくれるでしょう」

そういつて松根さんが見せてくれた子ども用マグネットボードには、光雄さんが記した「敦子」という文字がくつきりと残されていた。

松根さんはいう。「ほとんどの人は、朝起きて、今日はどういう服を着て、こういうものを食べて、と考えるでしょ。だとしたら、いちばん大切な「死」の瞬間を自

な問題です。だからこそ、インフォームド・コンセントがキチンとしていなければ、成り立つはずがないんです。誰でもない自分自身のことだからこそ、絶対に人任せにしないでほしい。ひいては、それが家族に対する最大の思いやりなのですから」

松根さんと光雄さんが知り合ったのは、彼女が中学2年生の時。

「たまたま、友人のお兄さんが主人と同じ高校の野球部だったのね。で、ある日試合に誘われて、すると、主人がマウ

分の意思ではなく、人に任せると、おかしな話じゃないですか。だからこそ、私は死が迫っていると判断された場合は、自然な形で死を受け入れた。ただ、そのためには痛みだけは取り除いてほしいんです。そのうえで大切な人たちと最期の時間を過ごすことができた方がいいじゃないですか。何度もいいいますが、自分の命は人に任せられるものではないんです。自分で決めるべきものなんですから」

そんな松根さんが今、一番に願うことが「命の日」の設定だ。

「死について考える、ということば言い換えれば、生きる」ということを考えることです。命の尊さを知れば、自ら命を絶ったり、人を傷つけることがいかに愚かな行為なのか、わかるはずなんです。毎月とはいませんが、少なくとも1年に1度は、みんなで命の大切さを考え、そして家族で話し合う日にしてほしい、それが私の一番の願いです」

誰にとっても、必ず訪れる最後の関門である「死」。そんな最期のひと時をどう迎えたらいいか。私たちひとりひとりが、「自分の納得のいく死に方」を考えるべき時期に来ているのだろうか。

人海ビギンズ